

〔調査研究報告書〕

大本山護国寺藏 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写経（久安―寿永）

小野 妙 恭

はじめに

何故、平成に平安後期の古写経が？

平成九年頃より毎月八日に護国寺山内の薬師堂を開扉して清掃をさせていただいていた。平成十一年六月八日に、薬師如来の台坐の下戸棚の奥に、箱らしいものが入り、手をのばして、蓋のずれている所からボロボロの紙本を取り出した。土ぼこりがたつた、かすかに大般若経とある、そーつとめくって最後を見た「寿永二年〇月〇日一交ノ、何某」とあるではないか、寿永？ 当時誰もが徳川三百年の寺なのに寿永？ 八百年前？ まさか、そんな声しきりであった。左下の二箱、右下に二箱、早速図書室に運んで調べることになった。後に、明治十年の什物記録に、虫損古写経（大般若経三百卷）とあるのを見て、この經典のことであろうとわかった。それから約百三十年、眠っておられたのが、平成の世に出て来られたという事である。

第一節 大般若波羅蜜多經とは

四處十六会の設、唐の玄奘三藏訳六百卷「開元目錄一」に唐太宗三藏聖教序。唐ノ高僧三藏聖教記、一万三百三十一紙、大唐ノ三藏玄奘於玉華寺訳。

四處十六会ニ四處とは、

一に、王舎城の鷲峯山

二は、舎衛国の給孤独国

三は、他化自在天宮

四は、王舎城竹林精舎の白鷲池なり

十六会は、一会ずつ何巻から何巻と鷲峯山に説く。途中省略して、最後のみ記す

第十六会は五百九十三巻より第六百巻迄、八巻―竹林精舎白鷲池の側にて説般若波羅蜜多分という。

この經とその誦持者を守護するのが、十六善神で、七千の眷族を従える神で、大般若会の時、必ず祭る。この經を供養するものは、諸々の神によって常に護られていると説かれている。かつて貴顕から衆庶まで多くの人々の信仰を得て、神社並びに大寺で毎年読誦し国家安穩と除災招福を祈願した。六百巻なので、七日ノ数ヶ月に亘り、百僧、六百僧と多人数で行われた。これを真読という。後世になって折本にし、短縮してパラ／＼と開いたり閉じたり大音聲で表題のみ唱え、次々に僧侶が読み上げたことにする様になった。これを転読と言う。又百巻ずつ入った木箱の耳の金具に棹を通して両方から担ぎ、その下をくぐるだけでご利益をいただけるという「般若担かぎ」という行事も行われた。雨乞或いは止雨、病氣平愈等を人々は祈り乍らくぐり抜けた。

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經(久安一寿永)(小野)

大般若經は全六百卷あって、一切經の中で最大の規模を持つ經典で、今回の平安の大般若經は八百年前の書写、奥書、添書のそして裏書等一卷々々が貴重な文化財である。

第二節 平成十一年より丸四ヶ年の調査を記す

一、発見時の状態

向って左二箱は蓋がずれていて中はぐしゃぐしゃに詰まっていた。

向って右二箱は蓋はしまっていて中が重箱が引出しの様に十段に一段に十帖ずつ入っていた(不揃いに)



写真1



写真2

この箱は木箱で中側は淡いうるし塗で外側は藍色で両端に金具があり棹を通してかついだと思われる。最後に筑波山知足院と書いてある(護持院のこと) 六箱なければならぬが此処では四箱だけで、一箱山内から見つかったけれど中味は違っていた。都合五箱現存している。頑丈な木箱である。鍵がかかる様になっているが破損している。

先ず巻数の調査(次頁へ)



写真 3

巻数の調査

全部で何巻？ 順番は？ 虫喰と埃を払う。

現状が良好 Ⅱ 四百六十五巻（虫穴有）

虫損 Ⅱ 四十九巻

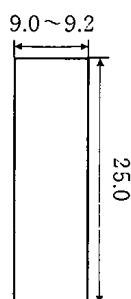
欠損 Ⅱ 百三十五巻…その中で約三十五巻は開巻不能。

一箱と約百巻（巻数不揃いに） 失落。

装幀

表紙 Ⅱ 洪引表紙本

卷子装から改装折本



折本に改装した時寸法
皆一定ではない

料紙 Ⅱ 楮^{こうぞ}…平安の美事なもの

八百年の間に何度か修復の跡有。

調査を始めてから色々先輩よりご指導いただいた。その一、一巻毎にカルテを作ること。写真6の様に、紙数、紙高等、奥裏書記し初め一回では見落としのあることを知り、この記述は大助りであった。後に正文と案文のつもりでノートにも記入した。五回くり返し。

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經（久安—寿永）（小野）

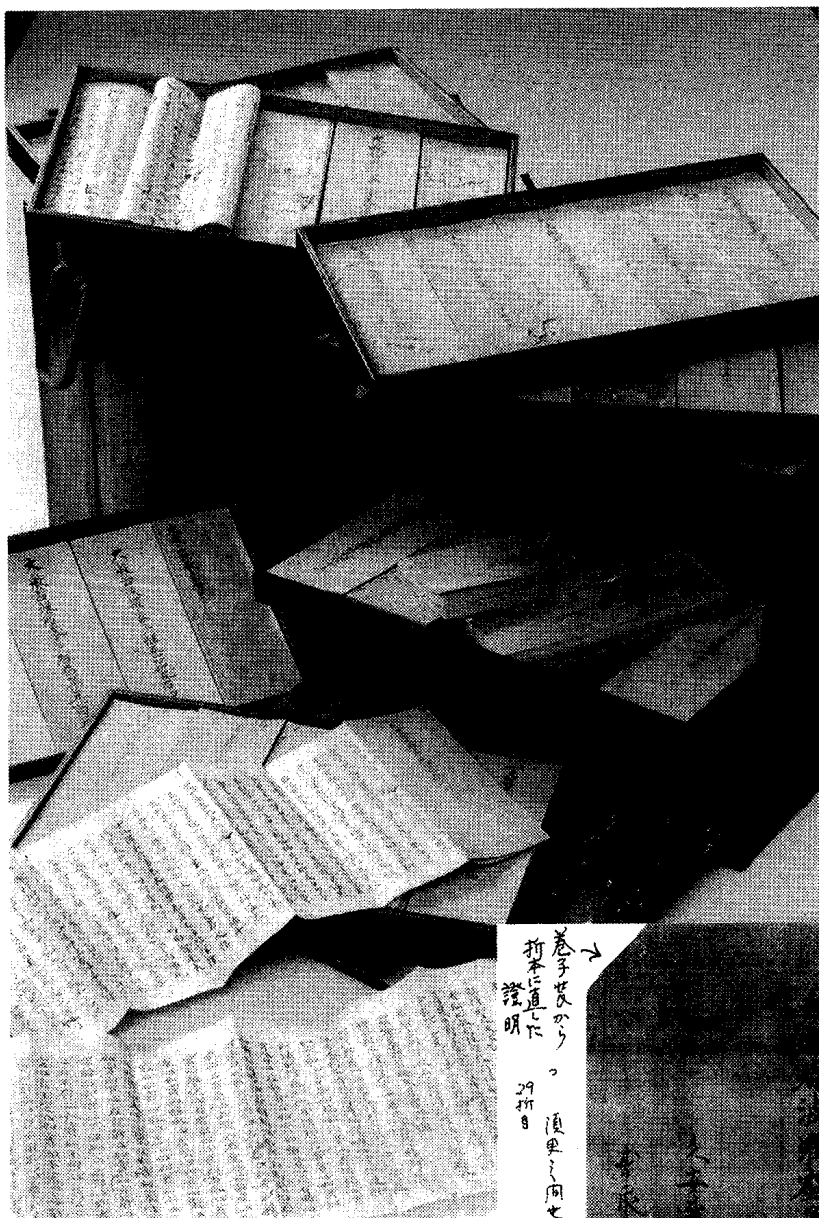
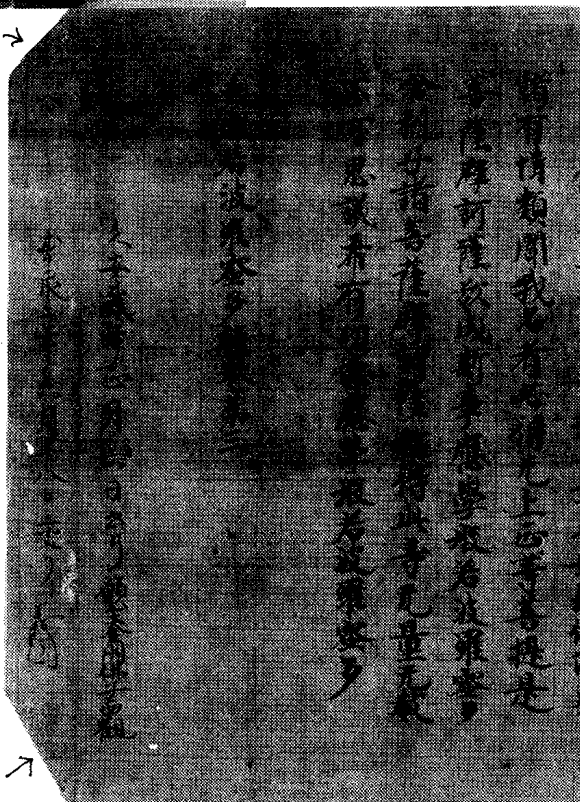


写真
4

→ 卷子装から折本に直した跡
折本に直した
證明
29折目
→ 漢文と同文又作破損
6折目
→ 平安後期
上り下り
→

卷子装から折本に直した跡



写真（コピー）5

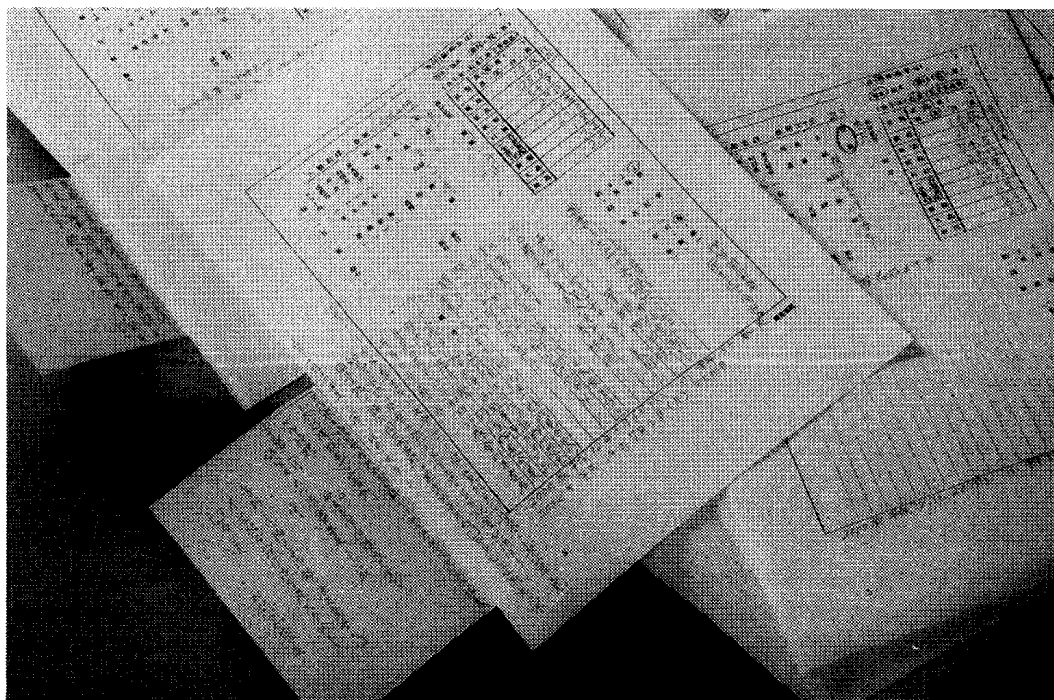


写真6 一巻ずつのカルテ

内 容

巻第一は欠損

奥書「久安二年[※]一月六日金剛仏子西観書し(第三巻)より
巻第二:これが書写の始まりである。校合は「寿永二年
六月十八日一交ノ義円」

※一一四六年(久安二年) 平清盛が安芸守に任ぜられ翌久安
三年に源頼朝が誕生している。

書写は全部の方が書写年月日と氏名を書かれていないの
で不明な点も多々あるけれど判明分だけ記す。必ずしも月
日も順序通りでないのでもまだ疑問が一杯である。

書写の場所も執筆僧によって違うことが判明した。多い
順に記すと、

1. 伊賀国山田郡往生院(千戸別所) 大方はこの寺。
2. 京都府(山城国)相楽郡笠置寺
3. 伊賀国山田郡瀧尾寺―不明
4. 笠置寺支院?福成院―不明
5. 壺坂寺? 第二百二十七のみ前後記載無し

八百年前のこと、現存しない寺もある。

大本山護国寺藏 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經(久安一寿永)(小野)

書写の僧名と巻数、年月日 記載有るもの

卷第二 年月日なし

金剛仏子西観

卷第三 久安二年正月六日書畢

金剛仏子西観

卷第四 久安二年正月九日書畢

願主金剛仏子西観

卷第五 久安二年正月廿四日書畢

願主金剛仏子西観

卷第七 久安二年二月廿四日書畢

願主金剛仏子西観

卷第八 久安二年三月六日書畢

願主金剛仏子西観

卷第九 久安二年三月十二日書畢

願主金剛仏子西観

卷第四十 久安二年三月廿三日於伊賀国

執筆僧弁榮

山田郡杜辻阪_レ書畢

卷第八十一 久安二年□月十九日

執筆僧笠置寺青龍門流寛朗

伊賀国於山田郡瀧尾寺書写畢。

卷第二百二十七 久安二年四月廿一日

於□壺坂□執筆僧弁榮畢

□爲自他_{諸衆生}□平等利益也

卷第一百七十一 久安二年三月廿六日書し

願主金剛仏子西観

卷第一百七十二 久安二年四月一日

願主金剛仏子西観

卷第一百七十三 久安二年四月七日

願主金剛仏子西観書し

卷第一百七十四 久安二年四月廿七日

願主金剛仏子西観

願以書写力自他諸衆生出離□生死速證大菩提_{書之}

卷第七十五 久安二年四月二十九日

願主金剛仏子西觀書し

卷第七十六 久安二年五月四日

願以書写力自他諸有情出離於生死速證大菩提
願主金剛仏子西觀書し

卷第七十七 久安二年一月十六日

願以書写力自他諸有生出離於生死速證大菩提
願主金剛仏子西觀書し

卷第七十九 久安二年五月廿一日

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提
願主金剛仏子西觀書し

卷第一百八十 久安二年五月廿六日

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提
願主金剛仏子西觀書し

卷第三百十 久安二年七月五日書写畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提
光明并

卷第三百二十七 久安二年五月十九日書畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大并
執筆僧弁榮

卷第三百三十三 久安？

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大并
執筆弁榮

卷第三百卅四？ 日付及名無し

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提
願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第三百卅五？

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提
執筆僧弁榮

卷第三百卅六 久安二年九月十六日書畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大并

大本山護国寺藏 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經（久安一寿永）（小野）

卷第三百卅七 久安二年十月廿六日

執事僧弁榮畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第三百卅八 久安二年十一月十二日書畢

執筆弁榮畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第三百卅九 曆應貳年己三月八日書写畢

紛失したので改めて書写されたのであろう。建武の後。

執筆僧朝圓

卷第三百四十 久安二年十二月廿四日書畢

執事僧弁榮

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大并

卷第三百五十二 久安二年歲次丙寅七月十五日

十卷結縁書写功必父母師頂并一切无依无怙靈等為

龍花会中最初得脱之資粮矣敬白仏子成嚴

笠置寺住僧成嚴以一誌□

卷第三百六十 延文三年戊戌二月廿八日於□□

願以書写力師□四恩等自身及法界皆志成仏道

紛失の為改めて書写された？ 仏子幸賢

卷第三百六十一 ……不明

結縁衆勝嚴□書 次に同じと思う

卷第三百六十七 久安二年九月三日書写しや

畢右志者為過去悲母往生極樂頓證菩提也

結縁衆勝嚴□書

卷第三百七十一 久安二季十月十四日

卷第三百七十一の続き

於笠置寺塔本房

僧琳暁一交畢

午時許書了是非他爲滅罪生善後世并也

子尅許出畢 不明

卷第三百七十七 久安二年九月廿一日

申尅書写畢筆師僧禪暁

慶長元年八月十九日に修補奉ったとある

卷第四百十三 年月日無し

願主金剛仏子西觀書し

願以書写力自他諸衆生出離於生死證得大菩提

卷第四百十四 年月日無し

願主金剛仏子僧西觀

願以書写力自他諸衆生出離於生死證得大菩提

卷第四百十五 年月日無し

願主金剛仏子僧西觀書し

願以書写力自他諸衆生出離於生死證得大菩提

卷第四百十六 年月日及び氏名無し

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第四百十八 久安三年二月十七日書畢

執事并榮畢

卷第四百二十 久安三年四月十八日

遍照金剛僧西觀書畢生年五十已

願以書写力自他諸有情出離於生死證得大菩提

卷第四百廿一 久安二年八月廿一日

僧嚴永結願畢

卷第四百廿二 久安二年八月廿三日

僧嚴永結願畢

卷第四百廿五 久安二年九月十六日爲

僧嚴永滅罪生善結願

大本山護国寺藏 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經（久安—寿永）（小野）

卷第四百廿九

久安三年四月廿四日午時許爲

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

結縁僧嚴永書畢依但此功力

法界衆生情共積共改愚癡法報早得般若種智離生死疾未來成佛畢

卷第五百十

久安三年三月九日善一日笠置寺

於福成院 酉尅書写し畢

筆師僧禪暁

卷第五百四十一

久安三年二月十九日書畢

執筆僧弁榮

卷第五百四十二

久安三年二月廿二日奉書畢

執筆僧公弁榮畢

願以此功德自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第五百四十五

久安三年四月廿九日

執筆僧弁榮畢

卷第五百四十七

年月日不明

執筆者不明

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第五百四十八

久安三年三月八日書畢

執筆僧弁榮畢

別の卷のものと思われるが、はり合せてあるので記す。

久安三季

歲次卯丁二月十日未時ひつじ書写於笠置寺

福成院丁卯志為法界穴生之也 僧禪暁

卷第五百四十九

久安三年三月廿四日己尅許書畢

執筆僧弁榮畢

願以書写力自他諸衆生出離於生死速證大菩提

卷第五百六十三 久安三年□月六日□□苑□寺

虫喰のボロボロの中より、不明。 写畢

現存の書写された僧名及巻数（書いてある方だけ）

弁榮 14 西観 19 厳永 4 禪暁 2 勝嚴 2 琳暁 1 成嚴 1 幸賢 1 朝圓 1 光明并 1 寛朗 1

紛失ノ為 紛失ノ為

奥書その二 校合（正）

全巻を四人の僧が一五〇巻ずつ受持つて、久安より四十年後の寿永二年（三年）にかけて千戸別所で校正（合）されている。それは、伊賀国山田郡往生院であつた。往生院を探した、仲々見つからない、その中ある日ボロボロをそーつとはがしていたら、往生院の下に、安養寺とあつたので早速調べたら、何と豊山派の寺で、大山田村甲野に現存していたのである。早速電話をかけ、御住職に「お宅の寺は往生院でいらっしゃいますか」と伺つた「えーそうです、しかし織田信長の伊賀攻めの時、往生院は大きな寺だった様ですがすっかり焼けて何も残つて居りません」との事、実はかつて、私は現在の三重県阿山郡大山田村鳳凰寺ほうじの薬師寺に草鞋をぬいで、お世話になっていた、その時窓から向うの山裾に見える寺の屋根を眺めた時「あそこが甲野と云う所で安養寺さんです」と教えられたけれど、まさかあの時の寺が昔の往生院だったとは、夢の様な話としか言いようがなく、今もはつきりと臉に残る寺の屋根に本当にご佛縁としか思えないことである。

久安の書写から四十年後に四人の僧侶が何故校合をされたのか？

寿永二年六月十七日から始めて、十巻交替で七、八、九、十と五ヶ月に亘り念入りに調べ、行を抜かしているもの、誤字、そして意味等細かく裏書とされている。例として、

寿永二年九月十三日以千戸直本一校ノ尊弁とある。千戸別所、千戸正本、千戸本等々。

尊弁 百十三巻 千戸の文字…七割に有り（判明の分のみ）

智鑒 百十一卷 ヌ 三割に有り

成慶 百七卷 ヌ 全部に有り

義圓 七十七卷 千戸無し(義円のみ寿永三年四、五月まで有る)

千戸別所のこと

寿永に校正(合)された時三人の僧は千戸別所で一交ノとか千戸本とか書かれている。これは、治承四年(一一八〇)に奈良東大寺の大佛が源平両氏の戦の爲に焼かれた(顔と胴)時俊乗坊重源が修復の材料や費用を勧進する為に、全国に七別所を設けられた。その伊賀別所を千戸別所と言う。周防の山の材木の勧進をされた時、防府の阿弥陀寺を別所とされた。

重源は伊賀大山田村の富永の新大仏寺、或は清浄光寺、そして往生院、その辺りの寺を当てられていたのかと思われるが、史料には建仁二年に伊賀の千戸別所が出来たとあるけれど、この大般若經の奥書では、その十九年前の寿永二年にはあったことになる。何しろ八百年前のことである。書写を信じれば、この經と東大寺との関りが見えてくるのである。伊賀国山田郡往生院と一卷の中に一番始めと中程と最後の三ヶ所に書いてあるこの文字を何故か消してある。次の表の様に三百巻以降は殆ど無い、大きな經典であるだけに当時の寺社では、ずーっと持っているには重すぎて、次の必要な所へ移動されたのではと推測する。一名流浪の經典とも言われた由である。財源に関係があつた。

奥書その三

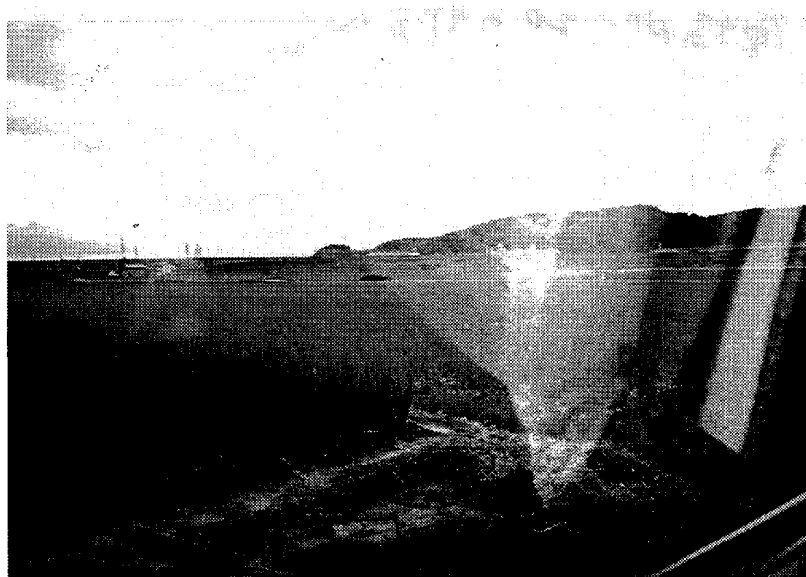
私が始めてこの經典を見た時、寿永二年と共に山城国久世郡際目郷長楽寺の御經なりという文字に、あッ

伊賀国山田郡往生院の消跡

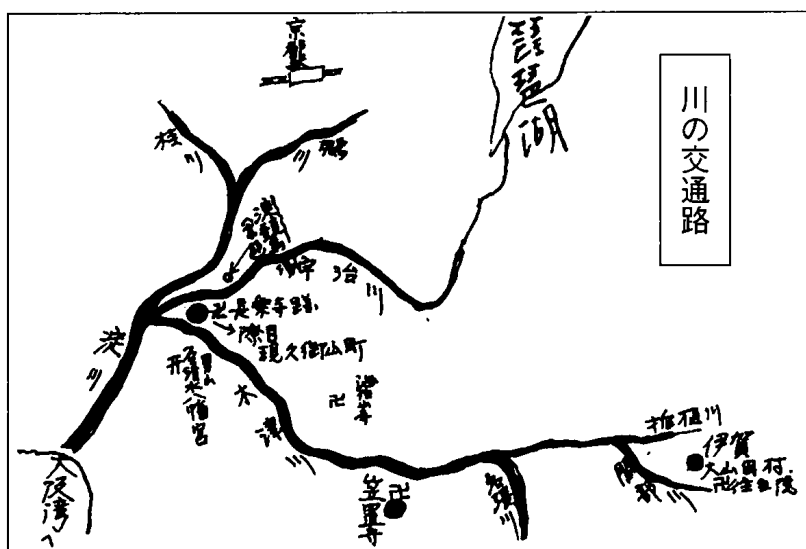
消してないのがあるもの=○
 消してあるが安養寺とあるもの=㊦

105 ○	154	251	287	403	往生院消跡…忘れたのか、わざとか消してないのものもある。 初の百合と終りの四百―五百合には、消跡も記載も無い。 591 ↓ 消してない。
108	156	254	288	404	
111	157 ○	255	291	405	
112 ㊦	158	262 ○	292	406	
113	159	263 ○	294		
114 ㊦	160	265 ○	297		
118 ㊦	161 ○	268	298		
119	163	269 ○	299 ○		
120 ㊦	169	304 ○		488	
121	171				
122	172	以下虫喰ひどい中から。			
124	173 ○	236			
125	175	239			
127 ㊦	176	240			
129	177	243			
130	179	244			
131	180	245			
133	182	248			
134	183	250			
135	184	253			
139	188	256			
140 ○	189	259			
141	190	260			
142	191	264			以前の往生院Ⅱ現在Ⅱ三重県阿山郡大山田村甲野真言宗豊山派安養寺
143	193	271			
144 ○	194 ○	272			
145 ○	195 ○	273			
146	198	274			
147	199	275			
148	200	276			
149	227	277 ○			
150	232	279 ○			
151	238	281			
152	242	282			
153 ○	247	283			

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写経(久安一寿永)(小野)



際目の長楽寺跡(上)と地図(下)



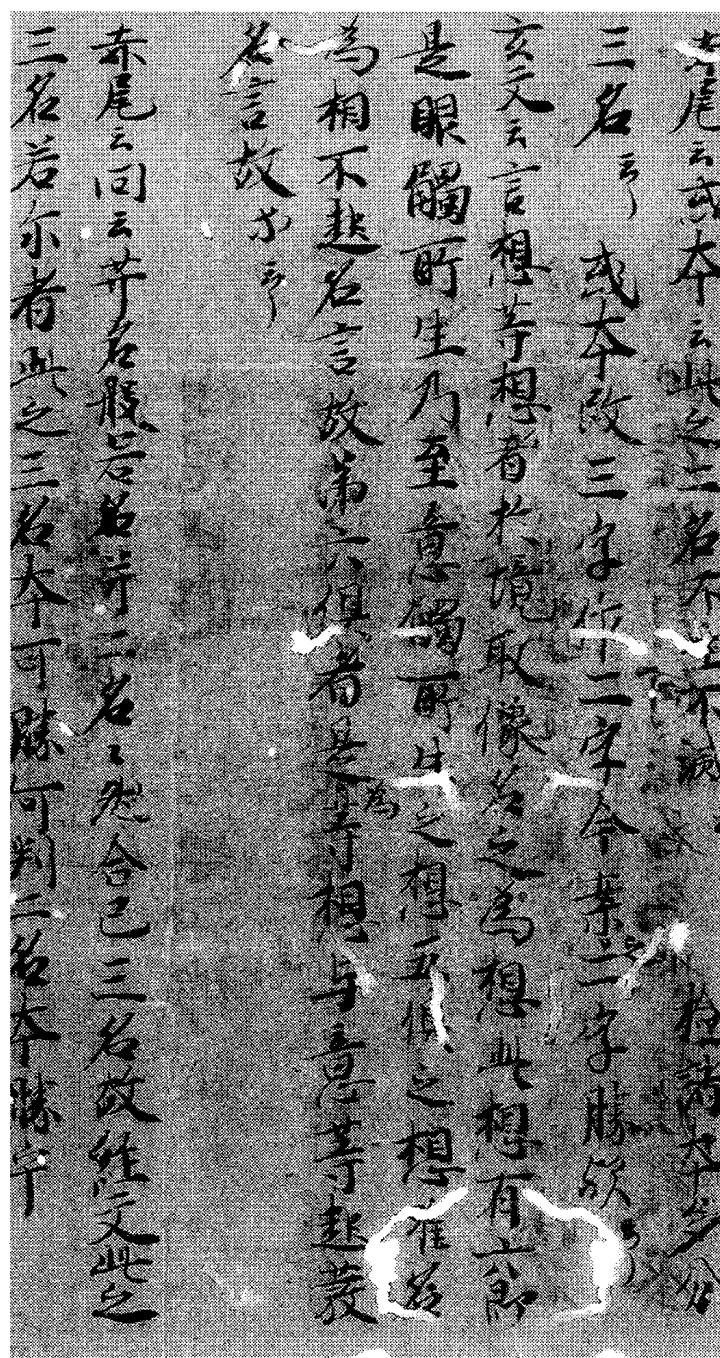
京のお寺の経典?と早速全国寺院辞典を調べた、京都在住の人にも頼み探して貰った、同名の寺は、八坂の塔の奥にあった。ひよっとして私は飛んで行った、しかしこの長楽寺は時宗の寺で、際目にあったという長楽寺ではなかったのである。只寿永の頃、建礼門院が安徳天皇をしのばれて、入水時の着衣で幡を作られ奉納されていた事が、同時代との御縁をしのんだ。

何か見落しは無いか?とくり返えし調べている中に、誠に内容の豊富な、勉強の跡が見えて、際目の長楽寺には応安時代(一二三六八)に伊賀から行ったのではと想像する。では、際目の長楽寺はいづこに? 次の

行動として又京都に行き、地図を頼りにタクシーで今も残る際目という所に降り立った。木津川と宇治川の三角州の様な所で今は何もなく、前方の山が石清水八幡宮の男山で反対側は、昔の淀城、今競馬場であった。京都の人は「京都は何辺も焼けましたよって、あらしまへんのと違いますか」との事であった。

裏書

この大般若は誠に沢山裏書



裏書の一例

を書かれている、校正の四人の僧なのだろうけれど、これが解明出来たらと思うが何十年かかることか？
 巻装の時書かれたのだらう字のまん中に折目があるので。八百年前にもこうして学んだ方があったとは、
 色々想像して見た。

裏書も何回も書いて表（添書も多い）にもしてあるけれど此処に主に何回も出て来た字句を書く。

赤尾云、妻室本、闕文、音訓、松室、玄文云世尊告、忠尊律師、成本、善現并、薬王品、大品経、大佛殿
 経、玄文云子嶋流、壺坂 等沢山有る。真興 義慶

或裏書に心静かによく読んで字を覚えなさい。とあった、仲々読解するのに何回もくり返えしの後であつ

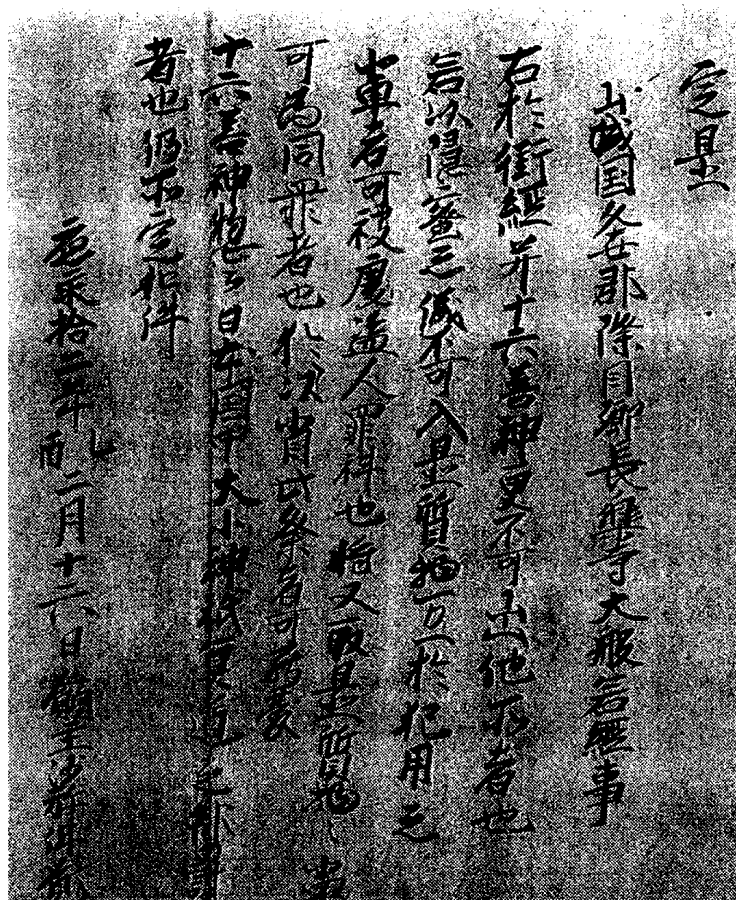
大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写経(久安—寿永)(小野)

た。現代も同じであるが、六百巻の書写は並大抵のことでは無いと思う。行をぬかしたり、字を間違えたり、若い僧が勉強されたのであろうけれど一人の方の一卷通し書かれているのやら一紙毎に、書体が違ったり、丁寧やら乱暴な字や、今に残る誠に、貴重な書写経である。

定置(写真左) 要約十六善神に誓つてぬすんだり質に入れたりしたら罪人になるよ。

この大般若経の百一、二百一、三百一、四百一、五百一の裏書に書かれたものであるが現存は二百一、四百一、五百一の三巻だけである。應永拾二年(一二三九四の)足利義満の頃長樂寺にあったという事である。

定置



質物とあるのには驚きである。京の寺々では何時の間にか紛失してしまったとの事であった。

この經典は移動の度に少しずつ修復をした様であるが八百年の星霜を、上手に行われているとは言えず、切角貴重な奥書を切ってしまったたり、ひどいものも有るけれど、八百年生きて来られたと言う事は、やはり貴重なものとして受け継がれたのであろう。

賛(イン)表紙を開いた一行目にこの字の書いてあるのが何巻かある。

これは、文武にすぐれ具は金品を表わすので、誠に貴重なものであると言うことの由。巻頭に賛

の書いてあるもの。

591	124
592	133
593	134
594	135
595	139
596	140
597	142
598	143
599	148
600	154
	163
	169
	191
	192
	198
	193
	199
	200
	269
	283
	284
	286
	287
	297
	300
	303
	304
	307
	308
	310

何故か400台一卷も無し。

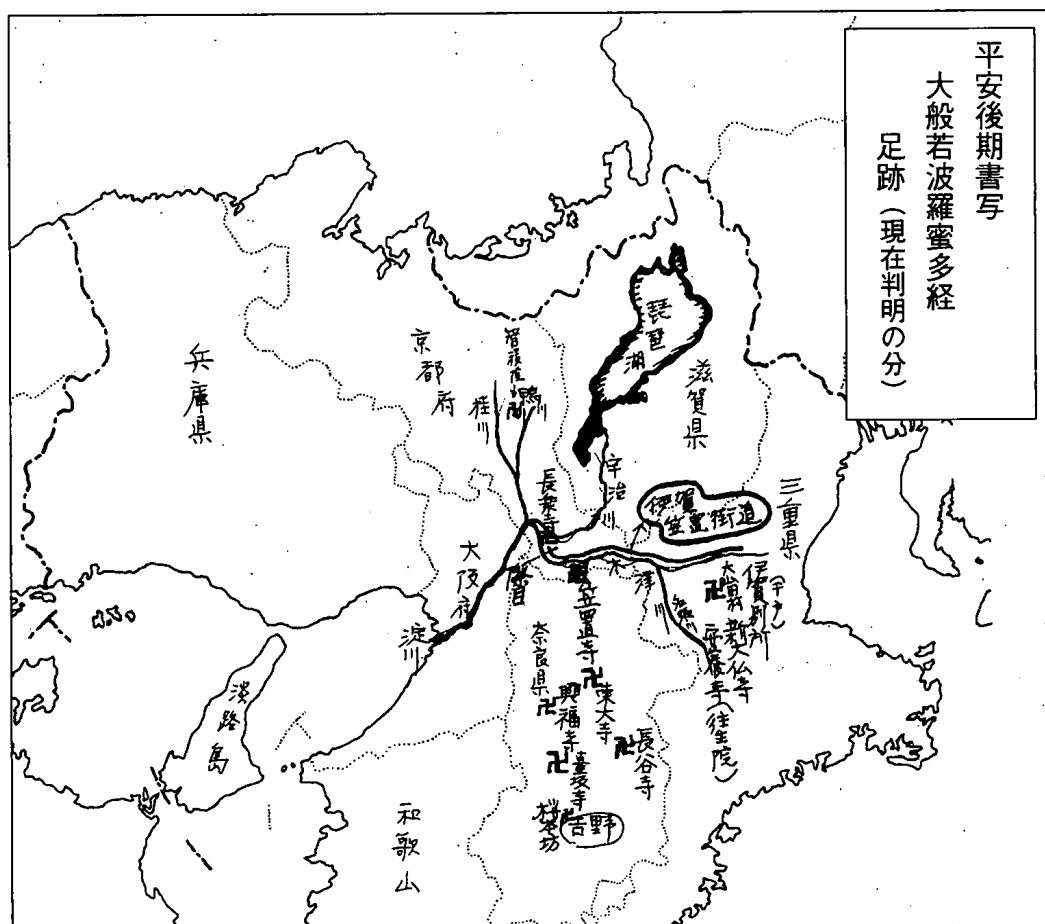
笠置寺のこと

前に述べた様に、卷八十一に寛朗、卷三百五十二に成嚴、卷三百七十一に琳曉、卷五百十に禪曉といづれも久安に笠置寺の住僧として書写されている。しかしこの笠置と言う字が略してあつて仲々わからなかった、平成十五年の一月、何回くり返したとか、或日、笠置とわかったのである。これもまさかと言う思いがあったのだけれど……あの有名な笠置寺が出て来ようとは夢の様であった。私は又飛んで笠置へ出かけた。京都から奈良線で木津へ、関西本線に乗換えて笠置下車、山の頂上が、笠置寺であった。ご住職にお話を伺った。

天智天皇六六四から千三百年の古刹で、解脱上人（貞慶）中興され、菅原道真公も参拝されているが弘仁年中に空海が虚空蔵菩薩の宝前で、求聞持法を修されている。又重源寄進の解脱鐘が有り大岩に弥勒像又虚空蔵菩薩も彫つてある。八百年前この大般若を書写される時きつと何かの御佛縁が伊賀の国とあったのではと想像する。福成院、瀧尾寺等末寺であつたのか、やはり何回も焼け資料が無いとのことであつた。後醍醐帝の行宮。

此处で伊賀と笠置と京の際目と木津川に沿って線で結すばれた様に思う。山又山をどうして？ 街道もあっただろうけれど川を舟での往来があつたのではと想像する。次に地図を掲載する。伊賀は服部川となる。

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經(久安一寿永)(小野)



- ① 伊賀山田郡(現阿山郡大山田村)
- 富永Ⅱ新大仏寺
- 甲野Ⅱ往生院(現安養寺)
- 清浄光寺(千戸)
- ② 笠置寺
- ③ 京都山城国 際目 長楽寺趾
- ④ 東大寺 興福寺
- ⑤ 壺阪寺

大般若六百卷の
経典が書写され、
久寿二年より
護国院に寄託に
来れりとの
判明した足跡。
長楽寺以後は不明。

所蔵先〔大本山護国寺〕〈1〉

調査期間
平成11年8月20日より
平成14年2月27日まで

巻数		巻数		巻数		巻数		巻数		巻数	
1	欠	51	奥	101	奥裏※	151	奥	201	欠	251	奥裏
2	奥裏	52	奥裏	102	欠	152	奥	202	虫損	252	虫損奥
3	奥裏	53	虫損奥裏	103	奥裏	153	奥	203	虫損奥	253	虫損奥
4	奥裏	54	半	104	奥裏	154	奥	204	奥	254	奥
5	奥裏	55	虫損	105	奥裏	155	欠	205	虫損奥	255	奥
6	欠	56	奥裏	106	奥	156	奥	206	欠	256	虫損奥
7	奥裏	57	奥裏	107	虫損	157	虫損奥	207	欠	257	虫損奥
8	奥裏	58	奥裏	108	奥	158	奥	208	虫損奥	258	欠
9	奥裏	59	欠	109	半	159	奥	209	虫損奥	259	半
10	欠	60	奥	110	欠	160	奥	210	虫損奥	260	虫損
11	奥裏	61	欠	111	奥	161	虫損奥	211	欠	261	欠
12	欠	62	欠	112	奥	162	欠	212	欠	262	虫半奥
13	奥	63	奥	113		163	虫損	213	欠	263	奥
14	奥	64	奥	114	奥	164	欠	214	欠	264	虫損奥
15	欠	65		115	半	165	欠	215	欠	265	奥
16	欠	66	奥裏	116	欠	166	欠	216	欠	266	欠
17	欠	67	奥	117	半	167	欠	217	欠	267	欠
18	奥	68	奥	118	奥	168	欠	218	欠	268	奥
19		69		119		169	奥裏	219	欠	269	奥
20	欠	70	奥	120	奥	170	欠	220	欠	270	欠
21	欠	71	奥裏	121	奥	171	虫損奥	221	虫損	271	虫損奥
22	欠	72	欠	122	奥	172	奥裏	222	欠	272	虫損奥
23	虫損	73	奥	123	欠	173	奥	223	虫損奥	273	虫損奥
24	奥裏	74	奥裏	124	奥	174	虫損奥	224	欠	274	虫損奥裏

(小野) (永一安久) 經寫古期後安平 殊多極難波若般大 經寺國經大本

25	奥	75	奥裏	125	奥	175	奥	225	欠	275	虫損奥
26	奥	76	欠	126	奥裏	176	奥	226	虫損奥	276	半
27	虫損奥	77	奥裏	127	奥裏	177	奥	227	虫損奥	277	半奥
28	虫損奥	78	奥裏	128	欠	178	欠	228	欠	278	欠
29	虫損	79	欠	129	奥裏	179	奥	229	虫損奥	279	虫損裏
30	虫損奥	80	奥	130	裏	180	奥	230	欠	280	欠
31	欠	81	奥月	131	奥	181	欠	231	欠	281	虫損
32	奥	82	欠	132	欠	182	奥裏	232	虫損裏	282	半
33	奥	83	奥	133	奥	183	奥	233	欠	283	虫損奥
34	奥	84	奥裏	134	奥裏	184	奥	234	虫損奥	284	虫損奥
35	欠	85	奥	135	奥裏	185	奥	235	半	285	欠
36	奥	86	奥	136	欠	186	欠	236	虫損奥	286	虫損奥
37	奥	87		137	欠	187	欠	237	欠	287	虫損
38	奥裏	88	奥裏	138	欠	188	虫損奥	238	奥裏	288	虫損奥裏
39	奥	89	欠	139	奥	189	奥	239	虫損奥	289	欠
40	奥	90	欠	140		190	奥	240	虫損奥	290	虫損裏
41	奥裏	91	欠	141	奥	191	奥裏	241	欠	291	虫損奥
42	奥裏	92	奥	142	奥	192	虫損奥	242	奥	292	虫損
43	奥	93	半	143	奥	193	虫損奥	243	虫損奥	293	欠
44	奥	94	奥裏	144	奥	194	奥	244	虫損奥	294	虫損奥
45	奥裏	95		145	奥	195		245	虫損奥	295	欠
46	奥裏	96	奥	146	奥	196	奥	246	虫損	296	半奥
47	奥裏	97	奥	147	奥	197	欠	247	奥	297	虫損奥
48	奥裏	98	欠	148	奥	198	奥	248	虫損	298	虫損奥
49	欠	99	奥裏	149		199	奥裏	249	欠	299	虫損奥
50	欠	100	奥裏	150	奥	200		250	虫損奥	300	虫損奥裏

[状態]

奥裏=奥裏有
虫損奥=虫損で奥書有
奥=奥のみ
虫損奥裏=虫損で奥裏有
裏=裏のみ
欠=消失
虫損=虫損で裏書無し
半=前か後か半分しかない
虫損裏=虫損で裏書有
半奥=半で奥書有
空欄=奥も裏も無し

[追加事項]

※=定是文有
月=月光殿より出たもの
◎=保存状態良好
多=特に多いもの
天=天台
大=大仏殿経

所蔵先〔大本山護国寺〕〈2〉

調査期間
平成11年8月20日より
平成14年2月27日まで

巻数		巻数		巻数		巻数		巻数		巻数		巻数	
301	欠	351	奥裏◎	401	奥裏※	451	奥裏	501	奥裏※	551	奥		
302	欠	352	奥月	402	虫損裏	452	奥裏	502	虫損奥	552	奥		
303	奥裏月	353	奥	403	裏	453	奥	503	奥裏	553	奥		
304	(出現)奥裏	354	奥	404	奥裏	454	欠	504	裏	554	奥		
305	欠	355	裏	405	奥裏	455	奥	505	奥	555	欠		
306	欠	356	奥裏	406	奥裏	456		506	裏	556	奥裏		
307	奥裏	357	奥	407	欠	457	奥裏	507	奥裏	557	奥裏		
308	奥裏	358	欠	408	欠	458	奥	508	奥	558	奥		
309	欠	359	欠	409	欠	459	欠	509	奥裏	559	虫損奥裏		
310	奥裏	360	奥	410	欠	460	奥裏	510	奥裏	560	虫損奥		
311	奥裏	361	奥	411	半奥	461	奥裏	511	奥	561	虫損		
312	欠	362	欠	412	欠	462	奥裏	512	奥裏	562	虫損奥		
313	奥裏	363	奥裏	413	奥	463	奥裏	513	奥裏	563	虫損奥		
314	欠	364	奥	414	奥裏多	464	奥裏	514	奥裏	564			
315	奥裏	365	奥裏	415	奥裏	465	奥	515	奥裏	565	欠		
316	欠	366	裏	416	奥裏	466	奥裏	516	奥裏	566	虫損		
317	奥裏	367	奥	417	奥裏	467	奥裏	517	奥裏	567	欠		
318	奥裏	368	奥	418	奥裏天	468	奥	518	奥裏	568			
319	奥裏	369	奥裏	419	欠	469	奥裏	519	欠	569			
320	奥	370	奥裏	420	奥	470	奥裏	520	裏	570	欠		
321	欠	371	大奥裏	421	奥	471	奥	521	奥	571	奥裏多		
322	奥裏	372	欠	422	奥	472	奥裏	522	奥裏	572	奥裏多		
323	奥	373	奥裏	423	奥裏	473	欠	523	虫損裏	573	欠		
324	欠	374	欠	424	奥裏	474	奥	524	虫損	574	奥裏		

(小野) (永寿一久) 経与書古後期平安経多羅波若般大 經寺國總大本

325	奥裏	375	奥	425	奥裏	475		525	奥裏	575	裏
326	奥裏	376	奥	426	欠	476	奥	526	奥裏	576	奥裏多
327	奥裏	377	奥	427	奥裏	477	大奥裏	527	奥	577	欠
328	欠	378	奥裏	428	奥裏	478	奥裏	528	裏	578	欠
329	欠	379	欠	429	奥	479	奥裏多	529	奥	579	奥裏
330	欠	380	奥裏	430	奥	480	奥裏	530	奥裏	580	奥裏
331	奥裏	381	奥裏多	431	欠	481	奥裏	531	奥裏多	581	奥裏
332	裏奥	382	奥	432	欠	482	奥裏	532	奥?裏	582	奥裏
333	奥裏	383	奥裏	433	裏	483	奥	533	虫損奥	583	奥裏多
334	奥	384	奥裏	434	欠	484	奥裏	534	奥裏	584	奥裏
335	奥裏	385	奥	435	奥裏	485	奥裏	535	裏	585	欠
336	奥裏	386	奥裏	436	奥	486	奥	536	欠	586	奥裏
337	奥裏月	387	奥	437	裏	487	欠	537	奥	587	奥裏
338	奥裏	388	奥裏	438	奥	488	奥	538	奥裏	588	欠
339	奥	389	奥裏	439	裏	489	欠	539	奥裏	589	奥裏
340	奥	390	欠	440	奥裏	490	奥裏	540	奥	590	大奥裏
341	欠	391	奥裏	441	奥	491	奥裏	541	奥	591	奥
342	欠	392	奥裏	442	欠	492	奥	542	奥	592	奥
343	奥	393	虫損裏	443	奥	493	奥	543	奥裏	593	奥
344	奥	394	奥裏	444	奥裏	494		544		594	奥裏
345	奥	395	奥裏	445	欠	495	奥	545	奥裏	595	奥
346	奥裏	396	奥裏	446	欠	496	奥	546	奥	596	奥裏
347	奥	397	奥裏	447	奥	497	奥裏	547	奥裏	597	奥
348	奥天	398	奥裏多	448	欠	498	欠	548	奥裏	598	奥裏
349	奥裏	399	奥裏多	449	奥裏多	499	奥裏	549	奥裏	599	(出現)奥裏
350	奥裏	400	欠	450	奥	500	虫損奥裏	550	欠	600	奥裏月

[状態]

奥裏=奥裏有
虫損奥=虫損で奥書有
奥=奥のみ
虫損奥裏=虫損で奥裏有
裏=裏のみ
欠=消失
虫損=虫損で裏書無し
半=前か後か半分しかない
虫損裏=虫損で裏書有
半奥=半で奥書有
空欄=奥も裏も無し

[追加事項]

※=定是文有
月=月光殿より出たもの
◎=保存状態良好
多=特に多いもの
天=天台
大=大仏殿経

山城国際目郷の長樂寺に在寺されたこの經典に応安二年（一二三八）とあり、定置が応永十二年（一一四五）とあるので此処までは京都だったがその後が不明である。推測するに東大寺の火災の勧進に関係があるとするれば、次に永禄十年（松永久秀と云う武将によって）再び大仏殿が焼けた時元禄五年に完成するまで、徳川五代將軍綱吉と桂昌院が多大の寄進をされている、その縁を隆光僧正が記念に求められて、遙々と東の護持院に求められた（運ばれた？）のではないかと。まだまだ研究すればする程奥深いものであるけれど、転（轉）読の經典ではなく學問として多くの僧達に学ばせられたのではと、そのイ本の多いこと、修復々とされ乍らこの貴重な經典が、平成まで生き続けられた事の尊さを感じる。真興僧都という記述のあとに義慶とあり、ひよつと興福寺の僧ではないかと。と早速聞いて見ましたら、お調べ下さいました所、実在していました。この方は、長保（九九九）、寛弘（一〇〇六）、長和（一〇二二）の間に御八講を宮中の方や、百僧、聴衆に講義された僧正であった様で、真興、義慶、貞慶（解脱上人）そして往生院第一世覺弁と重源とこの大般若經との關係が一本の糸で結ばれている様で、裏書に多くの謎が秘められていると思われる。

卷第九、初分轉生品第四之三

余時舍利子復白佛言世尊云——一切智智謂一切智一切相智の裏書に有った

真興と義慶はかく話をしていられるよ、と意味解明に時間がかかると思います。

この平安の經典箱の中に六百卷一卷を享保に時の住職が書写され入れてあった。

奉爲 大樹殿下御武運長久御子孫繁榮

御願圓滿天下泰平五穀成就萬民豐樂所也

維時享保十己五月吉祥日

筑波山護持院第十六世権僧正慧海納之 1725

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經(久安—寿永)(小野)

平成十一年六月よりご協力いただいた方々を記す (敬稱略)

大本山護国寺貫主岡本永司氏

大本山護国寺執事長小林大康氏

美術関係 寺元晴一郎氏

文化庁文化財調査官藤本孝一氏

総本山長谷寺甲田弘明氏

文京区文化財池田悦夫氏 京都在住赤木正子氏

興福寺辻明俊氏：元興寺を紹介いただいた。真興僧都・義慶僧都のこと

元興寺文化財稲城信子氏

大正大学山田昭全氏

大正大学坂本正仁氏

金沢文庫高橋秀栄氏

徳島文理大加藤優氏

豊山教学大会 平井宥慶氏、榊義孝氏他諸先生方

○実物は見て居られないが電話等お話を伺った方々

東大寺筒井長老

安養寺住職中森快進氏

笠置寺住職小林慶範氏：舎弟小林義亮氏(来山)

新大佛寺住職松本昇年氏

周防阿弥陀寺住職林寛孝氏

あとかぎ

平成十一年より薬師様のお導きで平安後期の大般若経を清掃整理、そして調査とさせていただけるとは、思いもよらない果報としか言いようがなく、夢中で今日までまいりました。赤子と同じ様な浅学の私が沢山学ばせていただき只々感謝で一杯でございます。丸四ヶ年たちましたがまだく沢山の謎で一杯でございますが、どうか八百年生き続けられた経典をお宝として保存して下さる事を願い乍ら、久安・寿永にお出まし下さったお坊さま方の笑顔が目に見える様でございます。一応枚数に制限がございますので今回は此処で終らせていただきます。 頓證菩提

有難うございました。

合掌

参考文献

大藏経

佛教語大辞典 密教事典

古文書学入門 京都市史

日本史辞典 古語辞典

護国寺史 地図辞典

大本山護国寺蔵 大般若波羅蜜多經 平安後期古書写經(久安—寿永)(小野)

古寺名刹大辞典 その他

日本文学史事典

阿弥陀如来作善集 伊水温故

永閑伊賀名所記

笠置寺激動の一三〇〇年

大漢和辞典・国語辞典

変体かな辞典

【キーワード】平安後期(久安)の書写・(寿永)の校正、千戸別所(重源東大寺勸進の寺)、贄いんという文字(貴重書ということ)、学問の為の經典(裏書多し)、何故西の方の大般若經が東の護持院(護国寺)に來られたか